

だ。何所からとなく悪臭が鼻をつく。微かに飛行機の爆音らしい音が聞えるも空襲警報は出ない。全てが麻痺しているのだ。風向きが、茶毘（だび）の臭気を遠慮なく鼻に押し込む。

収容した三人は、寮の裏の横穴壕に寝かせた。そこには、後輩で同郷の坂倉君が顔面白布で覆われ、目、鼻、口の所だけ穴を開けて貰って、同僚につき添われ横たわっていた。「何か言うことはないか」と聞いたら

「水蜜桃が食べたい」と一言。相当重症であった。（彼は昭和四十七年入退院を繰返し、顔と胸に大きなケロイドを持ったままこの世を去った）

翌七日（実際は六日は眠っていないので何日か判らない）本格的に救援物資を運ぶ。

大豆かすと米の少々入った握り飯、切削用に使っていた種油（火傷の傷に塗る薬がないため）、十円札東十束「一万円」を腰にタオル二本で巻き、罹災者にオート三輪で運ぶ。蟹屋町までは何んとか道が走れた。途中バウンドで握り飯は荷台にころんだが、そのまま箱に入れていく。

とにかく食べられる物であれば何でもよい。幸い破壊された水道栓から水が少しづつ出ていたので助かった。運んだ物と金は、誰にどう分配したのか記憶にない。昨日収容した負傷者は殆んど死んでいたが、探し求めて来る人が次々とあるので動かさない。

薬はなく、「水」を飲ませることも出来ず、死んでいくのを見ているだけだった。外の防火用水には、一杯にふくれた死体も入ったまま。火傷

で熱かったため熱湯と思わずに飛び込んだのであろう。うつぶせになって髪は焼け、腰に一本の紐だけ。男か女かも判らない。

ふやけているので引出せない。そのまま放置するしかない。

防暑帽を着用された仁科先生と（旧）広島高等学校の校舎に入る。倒壊はまぬがれたが、傾いていた。

「原子爆弾です」と先生の一声。六高の先輩だったので一言だけ聞かせて頂いた。

（旧）広島文理大の辺りでは、奉安殿の鉄の扉が、まるでトタン板を曲げた様に凹んでいた。

帰る途中、トラックに憲兵が乗り込んで来た。このトラックを軍に貸せとのこと。会社の物だから渡せないと言うと軍刀の鞘で尻を撲られ、そのまま強引に乗って行かれた。四、